「どこかで悲しい声がする」

2010/01/27

意識よりも体のほうが順応性が高いのかもしれない。なんて唐突に思った。
すっと目を開いて闇を睨む。予感はある。となりを見る。やはり空っぽの布団に、心の中にざらりとした感情が広がった。
それが苛立ちなのか悲しみなのか、絶望なのかあきらめなのかもう分からない。
吐き出したため息には疲れが濃くにじんでいた。
それでも放っておくことはできない。
そして誰に頼まれたことでもなく自分でそうすると決めたことなのだから、誰のせいにすることも出来ない。
苦しいと言い切ってしまえたら良かったかもしれない。
絡み付く思考を振り切って布団を跳ねのけた。
体だけは素直に動く。
感情は未だに整理がつかなくても。

いつもと同じ、空の見える廊下の行き止まりで太子がぼんやりと佇んでいた。
視線はどこを見ているのか分からない。瞳は何も見てなんかいないような色に沈んでいる。
近づきながら声をかければ、緩く首をめぐらせてこちらを向いた。
太子と三歩ほどの距離を残して僕は立ち止まった。

「声がする」

ぽつりと、かろうじて聞き取れる程度の囁きで太子はそれだけ呟いた。
僕は何も言わなかったから簡単に沈黙が生まれる。
こうなる度に、僕は沈黙は他人との間に生まれるものなのだといつも思う。
一人きりならそれはきっとただの静寂だ。
太子が沈黙と静寂、どちらを苦痛に思うのか僕は知らない。
ただいつものように、僕ら以外のすべてが消えてしまったような静けさだと思った。

それなのにその人は俯いて苦しそうな声を絞り出す。
あごに力がこもる様が見えた。
開く口から次に、何が語られるのかを僕はもう知っている。
「声がする。いっぱい、いっぱい、悲しそう、苦しそう、泣いてる、怒ってる、あれは誰だ？　どうしてそんなに叫んでいるの？」
僕が見つめる先で、太子が頭を抱えるようにして耳をふさいだ。
「眠れない。どうしよう。助けたいのに。どこにいるのかわからないんだ。でも聞こえる」
雲が動いたのか、月明かりが太子に差した。生まれる陰影に悲痛さを見いだそうとした。
そっと結ばれる唇を見つめていた。少し吸い込んで内側の柔らかい部分に歯を立てている。
じっくりと太子が僕を見据えていた。
この夜の闇のように、いつの間にか暗く濡れた瞳だった。
「どうしたらいい」
引きずり込まれるように仄暗い声。
どうしたらいい。どうしてほしいんだ。
それはこっちの科白だった。
命令があれは従おう。必ず全力で達成してみせる。
だけど命令がなければ僕は動けない。
それを決めるのはあなたなのだ。
僕ではない。
「どうして……」
答えを持たない、そもそも太子と同じ音を聞くことのできない僕は、どうしたって太子に届くことができないのだと今夜も思い知る。
だから僕は、今夜もまた誤魔化すように震える体を抱きしめた。
痩せたに違いない体の細さが僕は悲しい。そこまであなたを追いつめる声というものをもし僕が聞くことができたなら、たぶん僕はその声を消しに行くに違いない。
その声を救いたいとあなたが言うのにも関わらず、きっと僕はその声を消しに行くんだ。
もちろんあなたが僕に命令をくれるのだったら、別だけど。
ねえ。
「どうするんですか……？」
互いに見当違いの疑問しか持たない。
こうして抱きしめて体温を感じるほど近くに寄っても、視

線は交わらない。言葉は噛み合わない。
すれ違う。そのたびに摩擦が熱を生み、繰り返せば肌が千切れて血がにじむ。
痛みを伴っても離れようとは思えないから、また僕はこの傷が治らないうちにあなたを求めて、擦り切れる痛みに感情が膿んでいく。
どうしようもないですねって、笑えたら良かったのかな。
どうしたらいいんですかって、怒れたら良かったのかな。
もう、何もかもがどうでもいい。
あなたがいればもう、それだけでいい。

僕はもう、疲れてしまっていて。

両手であなたの耳をふさいだ。
何も映さない昏い瞳が僕の方を向いた。
ただの気休めでしかないはずだ。
あんたの聞いている音はきっと、僕の手のひらさえすり抜けていく。

助けて、と。
言えたら、良かったのか、な。

目を瞑って顔を寄せた。
言葉を殺すために唇をふさぐ。
あなたの唇で、僕のを。

やわらかくて、冷たくて、薄くて、静か。
静かだった。もっと緊張するかとも思っていたような気がする。
こうなってしまえばもう、一瞬前までの思考は意味を持たないんだと思った。
ひたすらに気持ちが凪いでいく。
何をしたかったのか、僕は忘れた。
ぽん、と頭の後ろに手のひらが触れて、そのことの方がよっぽどぼくを驚かせた。
思わず唇を離す。

太子が。
いつの間にか、濡れた昏い色の瞳に僕がいた。

「いい子、いい子」

頬がひきつるようにむずがゆくて、振れてみたら指先が濡れていた。
いい子、とまったり呟いて太子が僕の頭をなぜる。
子供扱いが今は心地よかった。太子の胸元に額を押しつけた。うつむいた顔を伝って、鼻先から滴が落ちていく。
いい子、と何度も繰り返して、抱きしめられて、なでられた。

「お前も悲しい声の一つなんだな」

安心したような声に答えを見つけた気持ちになった。
これで良いのだ、と。
ぱっとひらめくように鋭く、ただ一言、思った。
苦しい、悲しい。
泣いている、苛立っている、怒っている。
助けたい誰かに僕がなれればそれで互いに救われるのだと気づいてしまった。
それでいいのだと、気づいてしまった。
そのためにこの擦り切れそうな疲労も、腐っていくような痛みも、ぜんぶぜんぶ、必要なんだ。
ひとつ頭をなでられる度に、思った。

そうでなければ僕は、何のためにここにいるんだろう。
今にも壊れてしまいそうな気持ちをおしとどめて、ここに。

ご褒美のように与えられるあなたからの優しさを抱きしめたまま、僕は泣いた。
太子はずっと、ずっとそばにいてくれた。

日が昇れば仕事に出かける。
昨日なんて関係なしに、平然と日は昇りまた日常をこなさなければいけない。
廊下を歩いていたら反対側から太子が歩いてくるのが見えた。
僕に気がついてぱっと表情を変え、浮かれた顔でぶんぶんと腕を振りながら駆け寄ってくる。
沸き上がる思考や感情のすべてにふたをして面倒そうな表情を用意した。
体が緊張にこわばるのだけはどうしようもなかった。

「よ！　相変わらずのおイモ具合だな！」

それから楽しそうにべらべらと、流れるように繰り広げられるどこまでが本当かわからないような話をする。僕は相変わらず面倒くさそうな態度を維持し、たまに相づちをうちつつ言葉を返しつつ相手をする。
僕は適当に笑えているだろうかと、不安に思ったとたんに太子が言葉を切った。
じ、っと見つめられて表情がこわばった。

「お前、目、腫れてないか？」
「……いえ、」
気のせいでしょう、という僕の声が固くって、かすれていた。
納得しない顔で太子が黙り込んで、すぐにぽんと手を打った。
「寝不足だな！　しょうがないから私がいっしょに添い寝してやるよ！」
心がきしむ音がする。
それを無視してでも笑うことに意味はあるはずだった。
「ええー、遠慮したいです。……くさいんで」
「そこぼそっと言うなよ！　……え？　くさい？　マジで？」
「マジです」
「何だとこのやろ」
「ぎゃー、腕押しつけてくんじゃねぇ！！」
重たい体で腕を振るう。
殴って、太子が吹っ飛んでめそめそして、僕が文句を言って。
いつも通りだ。
いつも通りの日常をどうか。
「ちぇー。でも今夜お前んち行くからな。カレーで首でも洗って待ってろよ！！」
「そんな気持ち悪いことしないよ！！」
太子が廊下の角へ消える。
苛立ちを表して振り上げた手を、ゆっくりおろした。
ため息がのどに詰まり、胸のあたりが石でも放り込まれたように重く痛んだ。
どん、と体を打ちつけるようにして壁にもたれる。
もう、外の日差しの明るささえも億劫だった。

太子は。
夜のことを、覚えていない。

軋んでいく。ずれていく。
僕と太子の間で認識と記憶が食い違う。
それでも僕は、擦り切れそうな疲労も、腐っていくような痛みも、ぜんぶぜんぶ、抱え込む。
決めたから。見つけたから。昨日、答えを。

もう昨日決めたから。
もうここに太子はいないから、ご褒美はないのだから、泣くわけにはいかなかった。
体の両側にぶら下げた腕の先、拳を作って固いため息を飲み込む。
手のひらに食い込む爪の痛みはやさしすぎて気を紛らわすこともできない。
もっともっと深い痛みを僕はもう知っている。
それが必要なことなんだと繰り返し繰り返し言い聞かせた。
僕にも。太子にも。
この痛みと歪みが必要だ。
そう、ひたすらに信じ込む。

そうでなければ僕は、何のためにここにいるんだろう。
今にも壊れてしまいそうな気持ちをおしとどめて、あの人のそばに。

「泣き虫に告ぐ」

2010/04/24

妹子は疲れたのか、うとうとと視線をまどろませてやがて完全に瞼を閉じてしまった。
うーん、私、このままだと動けないんだけど。膝の上の妹子にそう言ってみたけど答えはなくて、やれやれ仕方ないなと苦笑した。
首をひねって、背後の机、その上に積まれた書の山を見る。でもすぐにまあ良いかと結論付けて忘れることにした。
どうせいつだって仕事は滞っているし、馬子さんには怒られている。
一日くらいじゃ何も変わらないだろう。
そう、聞いたらやっぱり馬子さんに耳でも引っ張られて小言を叩き込まれそうなことを、思って。
だって仕事も大事だけど、優しい部下も大事でしょう。優秀だったらなおさらさ。言い訳ならいつだって完璧だ。聞いてもらえるかはわからないけど。

それにしたってこの状況はちょっとチャンスだろう。誰も見てないことをいいことに遠慮なくにやりとして、妹子が普段は許してくれないこと、たとえば膝枕だとか髪をいじることだとか、を楽しむことにする。
じりじりとしびれてくる足が、足にかかる重みが、どうしようもなく幸せで、にやにやしながらなんだか泣きそうな私はきっと他の誰かから見たら変人だ。
自覚しても表情は変えられなくて、やっぱり泣きそうになる。

「妹子はいい子だよねー。オマケに優秀で、私なんだか鼻が高いよ」

返事なんかないのだ。でもそれでいい。誰にも聞かれないから言えることがある。さらさら、さらさら、指先で触れる髪はやわらかい。つまんではすべり落とし、すべり落としてはつまんで。

「今日もね、妹子、私のためにがんばってくれたんだよね」

起きていたら、あんたのためなんかじゃないですよ、くらいは言うかな。仕事です、とか。硬い声、不機嫌な表情、そんなに怒ったような顔しなくてもいいのに。そんなことを考えて。

「えらいね。えらいよね、妹子は。だって本当はそんなこと、」

膝の上で妹子が身じろいだ。息を吸い込んだところで止めて、私は動きと言葉も止める。一気に心臓が跳ね上がって痛んだ。

緊張した私の見つめる中で、でも妹子はそのままま動きを止めた。

すう、と再開される深い寝息に、思いがけず長いため息が出た。

手を伸ばす。

触れた妹子の肩に、衣の袖に、べったりと染み付く赤を指でなぞってみた。かたく乾いて指を刺す、その感触に胸の奥がうずいた。

そうして視線を部屋の戸口に向けるなら、そこには打ち捨てられた刀が見えるのだ。

鞘に収められて刀身はわからない、それでも柄にもべったりと、同じ赤が塗りたくられている。

不意に鉄錆の臭いを嗅いだ気がして首を振る。

肺が縮んでため息をしぼり出した。

紛れるように、さっき飲み込んだ言葉の続きをこぼす。

本当はそんなこと、

したくなんか、ないんだよね。

さらりと妹子の前髪を撫でる。

せめて夢の中は穏やかであればいいのにと、思う心がどこまでも偽善で嫌になった。

誰かを斬る度に泣くのは、もう癖なのかもしれなかった。

太子、太子とこんなときばかりは幼く何度も呼ぶ声に、私は誰かの報告を受けるよりも早く自分の命が狙われたことを知ることになる。

妹子は何も言わない。

ただ私の名前を何度も呼んで、泣いて、泣くだけだ。

妹子の頬に涙の跡はくっきりと、ああきっと、目を覚ましてからすごい勢いでこするんだろう。今更ごまかせるはずないじゃんか、と意地悪く呟いてそっと触れる。少しだけこする。妹子はうう、と眉をしかめて、でもまだ起きない。

調子にのった私はふざけて、妹子の泣き顔かわいかったよ、と、きっとこれも眠っている間だから許されること。普段なら制裁とばかりに右ストレートかはたまたローキックか。

全部照れ隠しだと知っているから余計に微笑ましくって。

結果余計に妹子の機嫌を損ねることになってるけど。

嫌なら、辛かったら、もう、止めていいんだよ。

こんな時ばかりは幼く、私にしがみついて泣きじゃくる妹子にそう言った。できる限りやさしく。

その言葉は嘘じゃなかった。
だけど。
覚悟はあります、と。
僕にはあなたを守る覚悟がありますと。

涙をいっぱいにした赤い目でそれでも真っ直ぐに私を射抜いて、妹子の視線は揺らがなかった。
その答えを聞いたとき、当然のように満足した私がいたことを私は私に誤魔化せない。
私はきっと判っていた。
判っていて、それでも念を押すように妹子からその言葉を引き出したのだ。
そうしてどこまでも卑怯な私は、お前がそんなに辛そうな顔をしていても泣いていても、それでも私を守ってくれるのだと、その覚悟にありがとうを言った。
妹子は泣きながら、笑った。
私は息をのむ。
妹子は笑って、涙をこぼしながら見惚れるくらいきれいに笑って、言う。
僕にはあなたを守る覚悟がある。
でも、それでも——どうしても、胸が、痛い、と。
そしてまたくしゃりと顔を歪めて、発作のように泣きじゃくるお前を見て私は初めて自分の罪深さに気付いたりするのだから。

本当に……嫌に、なる。
だから今日、私はせめてもの償いにひとつ覚悟をすることにした。
眠ったままでいいから、どうか、聞いて。

覚悟するなら捨ててほしい。
今すぐに。
なあ。

お前が眠っているのをいいことに、囁いた。
返事なんかないのだ。でもそれでいい。
誰にも聞かれないから言えることがある。
お前だったら何でも許すよと添えて。

覚悟をするなら、いつだって捨ててくれていい。

僕はあなたを守る覚悟がありますとお前が言った、その代わりに、私もひとつ覚悟をする。
いつだって捨ててくれていい。守るといってくれた、その言葉と涙と笑顔、そしてこんなにも卑怯な私への信頼で、私

はこんなにも幸せだから。
だから本当に、いつでも捨ててくれていい。
今すぐにでも構わない。
私を斬り捨てるのがお前だったら、私は、いつだってきっと、笑ってありがとうと言える。
きっとちゃんと、言えるから。

妹子は疲れたのか、私の膝の上で眠っている。
私は他のいろんなことを投げ出して、じりじりとしびれてくる足に、足にかかる重みに、どうしようもない幸福を感じている。
噛み締めるのはお前の覚悟。刻み込むのは私の覚悟。
妹子の髪をなでて、にやにやしながらなんだか泣きそうな私はきっと他の誰かから見たら変人だ。
それでも胸が苦しいのはどうしようもないから、あーあ、早く、妹子が起きてくれればいいのになとか思う。
そしたら泣き顔かわいかったよとか言ってみようか。きっと怒って殴られる。
そのままいつものように騒いでいれば、きっとまた笑い合える。
だから、さあ。

せめて夢の中は穏やかであればいい、でも私は一人でつまらないから、いつものように相手をしてよ。
さらさらと妹子の髪をいじって乱しながら、早く、と笑うように呟いた。

「ふるえ」

2010/05/08

はらはら庭先で洗濯物がはためいてる。
それ、直接見ているわけじゃないんだけど、部屋の影の動きで勝手に想像して、縁側から突き出した足をぱたぱたさせてた。
今日は天気が良かったから、洗濯日和。
妹子は普段めんどくさいのか洗濯物ため込むから、お休みの日はいつも洗濯してる。天気が良くても、悪くても。
でもやっぱり、天気はいいほうがいいみたい。
そうだよね。気持ちいいもんね。
こう日差しがあったかいと、きっと水が冷たくて気持ちいい。
私は部屋に仰向けに寝っ転がって何もしない。
開けっ放しの戸から吹き込む風がとてもいい。体半分部屋の中で、地面に足だけ投げ出して、日向ぼっこ。
外で洗濯をする妹子が小さくなんか歌ってる。
曲まではわかんないんだけど、たぶんたまに音外してる。
ほら、またぶれた。
気持ち良さそうな音が風にのってここまできて、風に合わせて影が動いて、ほんとに今日はいい天気。
ぱんぱんって洗濯物をはたく音。
軽く首に力入れて頭持ち上げて、見てみたらひとつひとつていねいに妹子がしわを伸ばして服を干していた。
ぱんぱんって手をたたくと、洗濯物も楽しそうに風に揺れ始めて。
ああ、なんだか本当に、急に泣きたくなるくらいいい日だなあって。

妹子が桶の中身を、全部ひっくり返しちゃったから、庭にひとつ大きな水たまりがあらわれる。
妹子は家の中にいっちゃって、いいにおいがしてきたから多分お昼ごはん。
私は逆に庭に出て、水たまりをのぞきこんでる。
水、捨てちゃうなら撒かせてほしかったな。
ぱって、きれいに撒けたらこのお日様なら、きっと虹を作れたのに。
もったいないヤツだ。

でも水たまりにはきれいに空が映っていて、鏡みたいでこれはこれで面白かった。
雲が流れていくのもよく見える。
たまに端っこに洗濯物の裾がちらちら見えるのも楽しかった。
ちょんって、真ん中を指でつつくと円ができる。
何回も何回も繰り返して、たまには両手でつついたりすると円同士が交わって別の形が見えそうになる。
何回も何回も、繰り返して、私はずっと水たまりをのぞきこむ。

行ってきます、って声聞いて顔あげたら、妹子が家を出るとこだった。玄関先で戸締り確認してる。
あわてて立ち上がったら眩暈がした気がして笑えた。
おかしいの、そんなこと、あるはずないのに。

「待って待って、私も行くよ」

駆け寄って付いていこうとしたら、ちらりと妹子が振り返った。
思わずどきりとして、足が止まる。

「……まあ、いいか」

じっと私の顔を見てから、妹子がそう呟いて、歩き始めた。
ちょっと、何がいいのかはっきり言えって。
分からないけれどもまあ構わず付いていくことにする。
どうせ妹子の了解を取る必要はないはずだ。いつだって自分の勝手で行動してた。今更、そんな殊勝に振る舞って見せても、ねえ。
ちらりと一度振り返る。庭先で、ひらひら洗濯物が揺れていて、水たまりがあって。
ねえ妹子、空が青くて気持ちいいね。
あの雲何に見える、私はカレースプーンだと思うんだけど。
妹子の歩いた場所を、ふんずける遊びをしながら付いてった。

どうやら買い物らしかった。町でいつもの順番でお店回ってる。野菜が最初でお肉が最後。その他の、例えばお茶とかお酒とかは、必要なときだけで今日は行かない。
買っていくもの見てたけど、どう考えてもカレーの材料でうれしくなった。

最後のお肉屋さんの前であれ、と妹子が不思議そうな顔をして、立ち止まる。
今まで買ったものを眺めて、がっくりと肩を落とした。

「やっちゃった……」

どうやらカレーにしようと思ってたわけじゃなくて、無意識だったらしい。それある意味すごいと思うぞ。条件反射とかいつものクセとか、そんなんか？
妹子が悔しそうだったから、私は機嫌が良くなる。
じゃなかった、間違えた。
そうじゃなくて。

「カレー食べたかったから私はうれしいよ」

妹子は悲嘆にくれた、あきらめた様子でお肉を買っていた。
あんまりにも落ち込んで見えたので、心配したお店の人に少しおまけしてもらってた。
良かったじゃん、妹子。

「別にいいんだけどさあ。はあ……」

とぼとぼと歩く妹子も面白くて、やっぱり帰りも、妹子とおんなじとこふんずけて歩く。

帰ってからしばらく妹子は本を読んでたから、つまらないからそばで私は寝転がって、気付いたらもう夕方。
日も沈み始めて、空が燃えたみたいに真っ赤っか。
妹子は洗濯物取り込んでいるとこだった。水たまりはすごく小さくなってて、もうコップで水こぼしたくらいになってた。
取り込んだ洗濯物を、妹子は部屋の隅っこに山みたいにして積んでいく。
意外なことなんだけど、妹子はこういうところでいい加減だ。気が向いたら畳んだりもするけど、基本的にはそのまんま。
意外すぎて、最初にこれを見たときはいつ畳むのか、今か今かと待っていたものだ。
そのときは結局、一晩経ってもそのままで、次の日仕事に行くのにどうするんだと思ってたら、山の中から適当に引っ張り出して普通に着てって、次の日もその次の日もそうだったからどうしようかと思った。
いや、どうしようもないんだけどさ。
帰ってきたら、脱いだものはかごに入れてひとまとめにして、平気で次の休みまでそのままだったりする。
でもこんなヤツが、干すときにはきちんと洗濯物をはたく

のが、面白くてならない。
ジャージだけは。
私があげたあの、ノースリーブのジャージだけは。
あまり着ないかわりに、すぐに洗うしきちんと畳んで押入れにしまっておくのが、不思議でおかしかった。
大切にされてるように勘違いしてしまう。
もう、着てくれないくせにさ。
最後に着たのいつだっけ？
そのくせに、たまに押入れから取り出しては洗ってくれたりして。
なんだよ。
どうしたんだよ。
らしくないな。

いろんな意味で小野妹子は、私が知っている中で一番面白いヤツだった。

夕ご飯の時間だった。私は机に座って足をぶらつかせてた。
妹子の後ろ姿が動くのを、頬杖付いて見てる。
規則正しく包丁が動く音。たまににんじんが転がって下に落ちて、むっとした顔で拾って洗ってる。
玉ねぎがしみたのか涙目で手拭を探したり。
家にいるときの妹子は、全体的に仕事してるときよりも、ずいぶん抜けてて面白いし楽しい。
仕事をしているとき、朝廷にいるとき、いつでも気を張っているみたいな強ばった様子がほどけて、本当の妹子ってこっちなんだろうなってすぐ分かる。
妹子も家にいるときは楽そうで、見ている私もほっとするんだ。
ぼとぼとと野菜がなべに放り込まれる。
ほら、また、跳ねたお湯が指にかかって小さく悲鳴。
慌てて水に指をさらして、ふーふーと息を吹きかけたり舐めたり色々してる。
野菜が煮えるのには時間かかるのに、妹子はなべのぞき込んでじっと待っている。
ちょっと離れたと思ったらカレールーをとってきただけで、無駄にぐるぐるお玉でなべの中身かき回して、そわそわしている。あんまりかき回すから、いっつもじゃがいも崩れちゃうのに、いつもぐるぐるかき回す。
今も。
ご飯の炊けるいいにおいがする。
ルーを入れればとたんにカレーのいいにおいも。
机の上に腕組んで伏せて、目を閉じた。
くつくつと、音が聞こえてきそうな気がした。
おいしそうなにおいがするね。
きっとおいしいカレーだね。

ことりと音がするから、まぶたを持ち上げてびっくりした。
鼻先で、ほかほかと白い湯気立てて、カレーがおいしそうによそられていた。
妹子がお皿を置いた音だった。
続いて、スプーンも。
びっくりした。
びっくりして動けなくって、その間に妹子はもうひとつお皿を持ってきて、それを反対側の席に置く。
そこが妹子の席だった。
水で出した冷たいお茶をふたつ持ってきて、やっぱり、そのうちのひとつを私の前に置いて、もひとつ妹子のとこに置く。
妹子がイスに座った。
呆然と、動けないまま妹子を見つめる。
妹子は静かに両手を合わせて、いただきます、って言ってスプーンを手に取った。
それから何も言わず、食べ始める。
ぱたりと。
涙が落ちて、それで泣いてるんだってわかった。

私が。
拭うことも忘れてじっと妹子を見つめた。
妹子は少し目を伏せて、静かにカレーを食べいていく。
妹子はお行儀が良くて、姿勢が良くて、ごはん食べる姿もきれいで、私はそんな様子を見ているのも好きだった。
「妹子」
呟いてみる。
妹子は、反応しない。
「妹子！　いもこ、妹子妹子妹子妹子！！」
我慢できなくて馬鹿みたいだって思ったのにどうしてだろうね止めらんない。あれれおかしいなねえ妹子私どっか壊れてやいないかな涙。泣いてる。止まんないああいもこ。妹子妹子。ねえねえ止まんない止められない。馬鹿みたい。わかってるのにね止まらないの。涙も名前も。
ねえ妹子。
なあ知ってた、声ってどうして聞こえるか知ってる。振動なんだって。空気がね、揺れるんだ。ふらふらふらふら、ちがうか。もしかしたらもっと激しく。ううんわかんない。だって見えないし見たことないもの。でもね知ってる。声って振動なんだ。音って振動なんだよ。なんで聞くことができる

のかって、その空気のゆれを耳が捉えることができるからなんだって。知ってたか？　知らないだろ。私偉いだろ。えらいから知ってるんだ。えらくて物知りだから知ってるんだよ。
ねえ妹子。
音は、空気の揺れで、声を聞けるのは揺れた空気を耳が感じるからで。
だからさ。
妹子。

きっと多分、空気を揺らすことができないと聞いてもらえないんだよ。
気付いて、もらえないんだよ。

「なあ……」

涙で喉を詰まらせて、奥歯をかみしめて最後に一度だけいもこ、と絞り出すようにして言った。
妹子は顔をあげなくて、私を見なくって。
ああ。
だからもう、ぎゅ、とうつむいて、我慢するしかなかった。

「私には、食べられないんだよ」
見ないんじゃない。見えないのだ。
もう私はこの世にはいない存在だから。
スプーンを持とうとしても指がすり抜けた。
スプーンの上に実体のない自分の手を重ねても一度言った。
「もう、だめなんだよ」

じっとうつむいてた。
気が遠くなるような感じ、ふっと気がつくと、部屋の中は真っ暗け。
ずっとイスに座ってうつむいていた。
いつの間にか誰もいなくなってて、いつの間にか私は一人で、妹子がいない。カレーもない。
私は何となく疲れてて。おかしいの、だってもう生きてないのにね。
でも疲れた気持ちで、ほっぺたこすってみたけど濡れてもいないし目だってはれてない。
こんなもんかあって、思って。

ちょっとだけ、笑えた。

「妹子、妹子どこ？」

今では妹子の家、私の家って言えるくらい知り尽くしてた。
そりゃそうだよね。だって毎日いるんだもん。
勝手に入ったって怒られない。追い出されない。
いい気なもんだ。

妹子はやっぱりもうお布団しいて、ちょうど寝ようとするとこだった。
枕元の明かりを吹き消して、暗闇。
部屋の隅っこに積みっぱなしの洗濯物の山もまた、きっとこのままなんだろう。

「おやすみなさい」
「はい、おやすみ」

答えて、目を閉じた妹子の頭を軽く撫でてみる。
いい子、いい子。
大の大人にそんなことしてやるのは私だけだろうからさ。

私だけは、妹子のこと甘やかしてあげる。

「おやすみ、妹子」

しゃがみこんで妹子の寝顔をずっと見てた。

「ねえ、私はここにいるんだよ」

呟いてみて泣けてきて、私は笑って好きだよって、言ってみた。

おやすみなさい。
と、
また明日。
を。

君に。

「ひとひらひらり」

2010/05/19

ざあ、と風が渡る。梢の騒ぐ音にはっとさせられて、何もないのにうつむきがちの視線を奪われる。
思わず立ち止まっていた。風の通り道を示すように、贅沢に惜しみなく、ほんのりと白い薄紅の花が散らされる。
僕の前を行く人も同じように足を止めていた。僕よりもずいぶん間抜けに、ぽかんと口を開けて今しがた花を降らせた枝を見上げている。
そんなにしてたら花びら、口の中に入るんじゃないかなあとか、思ったけど言わなかった。
代わりにそういえば、と最近誰かに聞いたようなことを口にする。

「花びらが落ちる前につかまえることができると、幸せになれるそうですよ」
「え？」

しまった、と思ったのはずいぶん後になってからだ。

「なにそれ、本当に？」
「さあ、同僚から聞いた話ですから、ただの噂だと。でも……」

こういうまじないの類を、この人が好きなことくらい知っていたのに。

「きれいですね。この景色を見てるといいことのひとつくらい起こりそうな気がします」

そのときの僕は暢気に桜の花を見上げてはただきれいだと、そんなことくらいしか考えてはいなかった。
太子の声が弾んでいたのに気づいたのもずいぶん後だ。
春の陽気のせいか、僕はきっと少しぼけている。
嫌な予感がしたのは振り返った太子の目がいやにきらきらしてるのを見てからようやくだった。

「……太子ー」

「そりゃっ。ぐぬぬ……ふん！！　てい！」
「太子ー？　聞こえてますー？」
「えい！　どりゃあ！！　うわあ～～～～い！！」
「日も暮れてきましたよー。もうおやつの時間だって過ぎちゃいましたよー？　気付いてます？」
「どりゃ～～～ぁぁあああッ！！」

僕は桜の木の根本で膝を抱えて座り込んでいる。根っこがごつごつして痛いけど、比較的平らな場所を見つけたら太い幹が背もたれになって楽だ。枝が日陰にもなるし。
特等席ともいえる場所に座り込んで、長時間花見を楽しんだ僕は満足で、正直言うとそろそろさすがに飽きてきた。地面につけたお尻が冷たい。
だから僕は、僕とは違い動きまわり飛び回り、活動的に花見を楽しむ太子に大きな声で呼びかける。

「帰りましょうよー」
「断る！」

まあ僕の提案がすんなり通ることの方が少ないから別にいいんだけどさ。
こっちを見もせずにきっぱりはっきりくっきりと、切り捨ててくるのはいかがなものかと。
やれやれどっこいしょ、と我ながらいささか年寄りじみたため息を吐きつつゆっくり立ち上がった。ああやっぱり、ずっと同じ姿勢だったから関節がバキバキ言ってるな。お尻をはたいてみたら冷たかった。でも湿ってない。桜の木の下は乾いている。
太子に歩み寄りながら腰をひねってみたら派手な音がした。
太子にも聞こえたみたいでようやく、びっくりした顔で太子が僕を見た。

「もうあきらめましょう。だって昼過ぎからずっと粘ったじゃないですか。それなのに一枚もつかめないってことは、あれですよきっと太子には無理なんですよ」
「むむむ無理って何だ！　無理って！！」
「えーっと、つまり才能がないとか？　あ、もしかしたら太子、桜か幸せに嫌われてるのかもしれませんよ。何かやったんじゃないですか？　例えば変な名前を付けたとか」
「へ、変じゃないやい！！　ダンベーって呼んでなにが悪い！！」
「あ、本当に名前付けてたんだ……ネーミングセンスねえな！　どういう名前だよそれ！」
「あ、ちょっとどけ！！　えい！！」

ぱん、と僕の顔の横あたりでまるで蚊でもつかまえるみたいに、太子が勢い良くのばした両手を合わせた。

「……」
「……」

そして見事に花びらは、太子の両手の間を避けてひらりひらりと地面に落ちていった。
ふたりして無言で、その行方を目で追った。

「……」
「……」

何となく互いに顔を見合わせて。
太子ががっくりと膝をついて、男泣きにむせび泣き始めた。うん、たいそううざい展開だ。めんどくさいやつめ。
そんな僕らに構うことなく、ひらひら、はらはら、桜は降り続ける。こんなに落としてもったいなくないのかな。でもきれいだよな。もう次の休みには葉桜かもしれない。なら、今日が桜を楽しむ最後の機会か。
上に向けて手を伸ばした。指先をかすめてはらりと花びらが落ちる。
つかまえようと思えば簡単ではなくて、でも難しいものではない。闇雲に腕を振り回すよりもこうしてじっと、近くに来てくれるのを待つだけでいい。

「太子、はい」
「な、んでそんな簡単にとれるんだよ！！」
「いやまあ、人徳じゃないですか？　日頃の行いとか」
「ムキ～～～～～！！」

がばりと太子が立ち上がり、桜の花びらを差し出す僕の手を払ってぽかぽか肩を殴ってきた。うん、ぜんぜん痛くないな。子供か、あんたは。

「なんで、なーんーでー！！　私にはできなくってお前にはそんな簡単にできるんだよー！！」
「遣隋使ですから」
「隋になら私だって行ったよ行かされただけだけど！！　うわあああバーカバーカ！！」
「あ、ほら、もう一枚」
「もう嫌だー！！　聖徳嫌！　お前なんか桜の根本に埋まって来年もきれいな花を咲かせてしまえ！　そして花びらになって私に捕まれ！！　聖徳命令！！」
「お断りだそんなこと」
「いーやーだーもーうー！！」
「あ……バカ動くな！！」
「ひっ……」

完全に癇癪を起こした太子を怒鳴りつけた。いや、別に怒ってるわけでもないし怒鳴りたいわけでもなかったけど。オッサンが駄々をこねてる様は何て言うか情けなくておもしろかったからもう少し見ていても良かったんだけど。
そうじゃなくて。

「動かないで」

太子の頭に手を伸ばした。びくりと、太子が肩をふるわせる。ぎゅっと目をつむって、なんだこの人、何か待ってるのか？

殴られるとでも思ったのだろうか。

僕はそっと丁寧に、額から左右によけられた前髪に触れた。

それからぎゅっと、目をきつく閉じたまま何やらふるふる震えているのが気味悪くなって、無防備なそこにデコピンをかました。

「あだっ」

太子がおでこを両手で押さえて僕を睨む。

涙目のその人の前で、握った右手を開いて見せた。

「ついてました。はい、どうぞ」

太子はぱちぱちと瞬きをして、僕の手のひらを不思議そうに見ている。

僕の手のひらには先ほど、太子の前髪からとった花びらが一枚。

太子はしばらく僕と手のひらを見比べて、それから小さくありがとうと、言って今度こそおとなしく薄紅の欠片を受けとった。

太子は花びらを大切そうに指で摘んで、透かすように裏表ひっくり返しながらまじまじと眺めている。

良かったですねと、それからもう一度、帰りましょうと太子に言った。

「ね、ねえねえ、これ本当に、私についてたの？」

「そうです、さっきとってあげたでしょう。ちゃんと、太子のものですよ」

「そっか。……そっかなあ。これ本当に、私がとったってことでいいの？　妹子じゃなくて？」

「だって太子についてたんですよ。僕じゃなくて。ただ僕はお手伝いをしただけです」

「そっかなあ……」

「そうですよ」

太子は悩む表情で立ち止まって、手のひらの上に花びらをのせてそっとなでていた。

そのまましばらく黙り込む。

だから僕もすぐそばで、舞散る花びらを見上げながら太子を待つ。

「そう、だよな」

太子がそう、むずむずとうれしげに、こらえられないとでもいうように口元をゆるませて呟いた。

「うん、私のだ。ありがとな！」

手のひらを静かに握りしめて、小さな春の欠片を閉じこめて、僕を見た。

にっと、口を真横にひいて笑った。

「帰るぞ！」

僕も気持ち程度、口元を持ち上げて応えた。

「はいはい」

日が暮れてくれば春先のこの時分、うっすらとした肌寒さを感じるようになる。

それが夕日に染まる空の色や、誰もいないのにはらはらと降り続ける桜の花びらなんかと相まって、ほんの少しだけ、さみしいような心地になった。

太子と並んで歩いた。何もないのにうつむきがちの視線の先には、拳一つ分くらいの距離を置いていっしょに揺れる影がふたつ。

振り返れば、誰に見せるためでもなく勝手に豪華に贅沢に、降り続ける花の雨。

隣を見れば春色の、幸せの欠片を眺めて笑う子供みたいな人がいた。

「風邪よりも難しい」

2010/08/23

……僕があの馬鹿のことを、

好き、かもしれない、なんて。

誰が。

何で彼なんかを好きになってしまったのだろう。

それはもう、もうすでに数えることさえ難しいくらい、何度も繰り返し続けてきた疑問。

あっさりときれいな解答が見つかるならもう、とっくのように僕は解放されている。

そのはずなのにも関わらず、まだぐだぐだとこの僕が、らしくもなく頭を悩ませ続けているのはきっと、かたくなに認めようとしないからだ。

疑問の根底にある一つの仮定、そもそも、その前提を認めようとしないからこそ、解ける問題も解けないのだ、と。

わかっている。いや、わかりたくないのかもしれない。

だって未だかたくなに、ずっと考えているくせにそれすら認めたくなくて否定して、目をそらし続けているのだから。

だって、そうだろ？

誰が認められるかこんなもの。

しかしそれでも時間は過ぎて、僕は確実にあの馬鹿と一緒にいる時間を積み重ねている。

何で彼を好きになってしまったのだろう。

なんて、もう考えたくもないというのにその疑問は相変わらず、頭の中に居座り続けている。

それはつまるところあまり積極的には認めたくないどころか見向きもしたくないレベルの話なのだが、僕の脳内にあの馬鹿が居座り続けているということでもあり、そろそろ家賃でも請求してやりたいくらいだ。

しかも今まではぐるぐると思考が同じ場所で停滞するだけで、どちらかというと精神的負担が大きかったというか、むしろそれしかなかったのに、ついに身体症状にまで不都合をきたしてきた。

なぜだ。なぜ、ここまで僕があんなやつのことを考えてやらなければいけないのか。
ぼーっとする時間が長くなる。注意力散漫。気もそぞろ。上の空。食事をすればため息が出る。食べ物がうまく飲み込めない。食欲がなくなる。夜眠りにつくまでの時間が長くなる。夢を見れば落ち込む。布団にはいることすらおっくうになる。
病的だ。もう、ここまでくると。
なぜだなぜなんだ、何で僕がこんな目に、というか何で相手があんなバカなんだ、とやっぱり最後には疑問が巡って振り出しに戻る。
あのバカといると動悸がする。思考がふわふわと浮ついて思考能力が鈍る。全身熱でも出たみたいになる。風邪か、そうか風邪なのか、と自分を騙せればきっともう少しくらいは楽になるのに、それもできない。
自分に嘘を吐くことは難しい。

あのバカが。
太子が。
何か言う。馬鹿なこと。アホな思いつき。
泣いたり、笑ったり。
すぐそばにいて。
僕は胸が苦しい。

指先が焦れる。痺れる。
胸の中がかき乱されて何も考えられそうにない。
どうしたというのだろう。これが本当に自分だろうか。嘘みたいだ。嘘は吐けない。
こんな自分は知らない、わからない。
とうてい、受け入れられそうになくて。

僕は相変わらずずっと、
苦しい。

「すみません」
はっきりと固く強ばった声だった。聞きようによっては怒ったような声だった。ひどく不機嫌な低い声。すみません、なんて、微塵も思ってないような。

空気を叩き壊すような声だった。
ぽかんと、表情を止めて太子が見上げてきた。
そのまっすぐすぎる視線を受け止められなくてふいと他所を見た。

「用事を、思い出しました」

後はもう知らない。
たとえば太子の隣でにこにこ笑っていた竹中さんも僕を見ていることだとか、じわじわとにじむように、太子の表情が変わっていく様だとか。
もう、知らない。
僕はこの場にいたくない。
言い捨てて、さっさと踵を返した。ずんずんと歩いていって、どんどんと速度を増して、ほとんど飛んでいくように景色が流れる。
びゅうびゅうと風の音が耳元でしそうなくらいなのに、相変わらず今日の天気は穏やかで呑気だ。
いつの間にか強く唇をかんでいた。痛みすらどこか遠い。
離れれば楽になると思ったのにそんなこともなく、もうずっと、胸が苦しい。
息が切れる。いつの間に走っていたんだろう。
面倒くさくなって足を止めれば、今まで意識しなかった分の負担が一気にのしかかるように、ばくんと心臓が騒ぎ始めた。口を開けば喘ぐような呼吸につながる。息も心臓も胸も、この際もう何もかもが、痛くて辛くて苦しかった。
誰もいないのをいいことにうずくまる。風があまりにも気持ちよく吹くものだから、ふらふらと、道のはじに仰向けに倒れ込んでみた。
生い茂る背の短い草がちくちくと衣を越して皮膚に痛くて、でも地面は柔らかくて、起きあがることができなくなった。
雲が流れていく。
眺めて、しばらくの間何もかもを忘れられた。
うつらうつらと、瞼が重くなる。
そうだ、昨日もうまく眠れていない。
バカは誰だろうと自問する。やっぱ止める。
努めて思考を停止させて、空が青いのとか風がそよぐのとか、そういうのを、無心で受け止めるようにする。
休もうと、思った。

「おい？」
「は、わああ！」

だめだった。

「うっわ声でかいなお前鼓膜に穴空いたらどうすんの、てか空いてない？　ちょっと確認してよ」
「空いてませんよ空きませんよさすがにそんな肺活力ねーよ！　っていうかそんなことになったらふつうに僕の声聞こえませんからね！？　ああもう離れろうっとうしい！！」
太子が耳を向けて顔を近づけてくるので、わりあい必死で両手で押しやった。声が妙にひっくり返った。
ほんと、何で僕こんな必死になってんだろうな。
ほんと、バカみたいだ。
「なんで、こんなとこいるんですか！？」
「こっちのせりふだろ。なーんだ妹子、用事あったんじゃなかったのか？」
ぎくり、と体が強ばる。
完全なやぶ蛇に、ぎこちなく体を起こしてどうにか太子からさりげなく離れながら、いいわけを考える。
動け、脳。
さっきは止めようと思ってたけどやっぱりがんばって。
「えっと」
太子の顔を見れなかったのはそっちに太陽があってまぶしいからで、別に、それだけだ。
だから正面を向いたままぎくしゃくと言う。いやあったと思ったんですけど気のせいでした。とか、そんなん。
だめだバカだ、いきなり頭は働かない。我ながらなかなか悲惨な言い訳があったもんだ。むしろそっちに感心してしまう。
「ふーん、そうなんだ」
そうなんですよ、と口の中だけで呟いておいた。
さすがにもううかつに、何かを言う気にはなれなかった。
太子はそれ以上聞いてこなかった。
ただ勢いよく僕の隣に腰を下ろし、さっきまでの僕のように、寝転がった。
距離が近い。拳一個分。
近い。
別の意味でぎくしゃくと、関節に何かはさまってるみたいに動けなくなる。
太子は寝転がったままのんびりとしている。

おそるおそる、のぞき込んだ顔は空ばかり見ていて僕を気にした風もなくて安心する。
この人は何のつもりだろうと、ぼんやりとしてしまった。
太子は空に腕を伸ばして、あの雲カレーみたいだな、とかそんなことを言う。
あの雲カレーみたいだな。取れないかな、届いたら食べられないかな。
「そうですね……」
それに適当な相づちをうちつつ、考えようとする。
どうしたんですか。竹中さんは。ひとりで？　この先に用事が。なんで寝っころがってるんだよ仕事しろ。どうして来たんですか。

僕を追ってきたんですか。
なんて。

言えない。言えるはずがないだろ、それは。
それは自惚れが過ぎるから。
何も言えずに黙っていた。

真似をするようにまた、僕も空を見る。
風の流れを示すように、ゆっくりと、少しだけ雲が動いていく。
「妹子さあ、いきなり帰っちゃうから。気になって追っかけてきたんだけど……」
ほとんど眠りそうな声で言うのに、もう、勝てないなあなんて、泣きそうな気持ちで思ってしまう。
何てことを言ってくれるのだろうかこのバカは。
今までの僕の想いが、わかっているのだろうか。
「いい天気だしおなかペコペコ、もう死にそう……」
「そうですか……ってええ！？」
しんみりする暇もなかった。
なぜかとなりに寝転がる太子がミイラになってたから。
「み、水……この際墨で、いい」
「お腹すいたんじゃないんですか！　でででで絞るな！腕を！」
「ポカリ！」
なぜかぺなぺなに干上がった腕をつかみ返して、ああもう、心臓が痛む隙すらない。

いつの間にか胸の痛みが楽になっている。
いつものバカ騒ぎの中心に立っている。
周りをぐるぐる周り続けるのが太子なのか、それとも気付いていないだけで、ぐるぐる振り回されているのが僕なのか。
たぶん、後者。
しゃくだからまだ、認められそうにはないけれども。

「ほらもう！　世話がかかる偉人だな！」
「あ、それ、誉めてる？」
「誰がミイラを誉めるか。せめて治ってから言え」
「妹子、治して」
「わかってるよ！！」

本当はきっとわかってはいない。
だって叫んでしまってから、はっとして見たら太子がもうこれ以上ないってくらいに愉快そうに笑ってたから。

もう何か言うごとに墓穴を掘っていきそうだった。いっそこの馬鹿を埋めてやりたい。そしたら花くらい供えてやってもいい。
口を真横に引き結んで、息を止める。
胸は苦しくも痛くもない。
つかんだ右手からは違う体温が。

まずは、飲み物。それから食事。
冷蔵庫に何が残っていたか。思考を必死にそちらに逸らして、へなへな太子をひっぱった。